

## 金華道情調査報告・その二

——二〇一五年八月・十一月

豊浦鎮 朱順根 ——

松 家 裕 子

はじめに

この文章は、中国浙江省金華の歌と語りによる藝能「金華道情」について、二〇一五年八月および十一月に、金華市郊外の豊浦鎮で行った実地調査の報告である。報告者は先に「金華道情調査報告・その一——二〇一二年三月・二〇一三年三月」(以下、「前回報告」と略記する)を発表した<sup>①</sup>。今回の報告はその続編にあたるが、内容からいえば、前回は前置きでこちらが本編になる。

今回二回の調査は、いずれも、金華市豊浦鎮において、金華道情を代表する藝人である朱順根さんを対象として行った。朱順根さんは、中華人民共和国政府から金華道情の伝承者として認定を受けた、いわば人間国宝

である。一九四二年に豊浦鎮に生まれ、調査当時の年齢は七十四歳(数え。以下同)。幼少時に片目の視覚を失ってこの道に入った<sup>②</sup>。金華道情はもともと、おもに目の不自由な藝人者によって担われてきた。その苦勞多い人生も含め、朱順根さんは、金華道情のありかたを体現してきた藝人者といえるだろう。

報告者は、各調査二日ずつの計四日、朱順根さんの実演に接し、またご自宅にうかがって多くのお話を聞いた。以下、「藝人者」「上演の場」「演目」の三つの観点から、順に報告を行なう。各部分のタイトルは、「一 朱順根さんについて」「二 積道書場における道情の上演について」「三 金華道情の演目について——『皇涼傘』『張百屁売小猪』ほか」である。演目については、長篇『天宝箱』『尼姑記』『皇涼傘』、短篇「包公と牛の舌盗人(ぬすびと)」「賢い嫁の話」「夫婦の手紙(夫妻通信)」「屁っこき張の子豚売り(張百屁売小猪)」を紹介する。

今回の調査の概要は以下のとおりである。前回報告にも記したが、追加・訂正を行なって再録する。

I 二〇一五年八月

調査者…松家裕子。

1 八月二十七日(木・旧暦七月十四日) 午前八時  
すぎから十時半すぎまで

場所…金華市金東区豊浦鎮、積道書場。

調査協力者…張根芳先生(元金華市金東区文聯主席)、黃艷笑さん(豊浦鎮文化站长)、朱順根さん。

調査内容…現地政府の資金援助のもと行われた朱順根さんの金華道情の上演に立ち会い、鑑賞、観察、録画を行なった。道情終了後、朱順根さんに二十分ほど聞きとりを行なった。

演目…短篇「包拯と牛の舌盗人」、長篇『天宝図』

(一部)。

2 八月二十八日(金・旧暦七月十五日) 午前八時  
すぎから午後五時ごろまで

場所…金華市金東区豊浦鎮、積道書場および朱順根さん自宅。

調査協力者…盛根旺さん(金東区曲藝家協会主席)、朱順根さん、朱必蓮さん(朱順根夫人)。

調査内容…調査者の依頼によって行われた上演について、これを鑑賞、観察、録画した。また、上

演の前後および休憩時に、朱順根さん、朱必蓮さんに聞きとりを行った。

演目…長篇『尼姑記』(全本)。

II 二〇一五年十一月

調査者…小南一郎先生(泉屋博物館館長)、松家裕子。

1 十一月二日(月・旧暦九月二十一日) 午前八時  
から午後四時半ごろまで

場所…金華市金東区豊浦鎮、積道書場および朱順根さん自宅。

調査協力者…朱順根さん、朱必蓮さん。

調査内容…現地政府の資金援助のもと行われた朱順根さんの金華道情の上演に立ち会い、鑑賞、観察と録画を行なった。また、上演の前後および休憩時に、朱順根さんと朱必蓮さんに聞きとりを行った。

演目…短篇「賢い嫁の話」、長篇『天宝図』(一部)。

2 十一月三日(火・旧暦九月二十二日)、午前九時  
半から午後四時ごろまで。

場所…金華市金東区豊浦鎮、積道書場および朱順根さん自宅。

調査協力者…朱順根さん、朱必蓮さん。

調査内容…調査者の依頼によって行われた上演について、これを鑑賞、観察、録画した。また、上演の前後および休憩時に、朱順根さん、朱必蓮さんに聞きとりを行った。

演目…短篇「夫婦の手紙（「夫妻通信」）および「屁っこき張の子豚売り（張百屁売小猪）」、長篇『皇涼傘』（一部）。この日は、すでに書き起こしのテキストのある演目を依頼した。<sup>6)</sup>

現地の研究協力者は、浙江師範大学江南文化研究センター（「江南文化研究中心」）の黄霊庚教授・李聖華教授、張根芳先生、黄艶笑さん、盛根旺さん、そして、なによりも朱順根さん、朱必蓮さん、である。朱順根さん、朱必蓮さん夫妻が調査に快く応じてくださるのは、張根芳先生への信頼にもとづき、張根芳先生の協力がなければ、わたしたちの金華道情の調査は成り立たない。そして、張根芳先生のご協力が得られるのは、黄・李の両教授のお力添えによる。両教授とは、富山大学の磯部祐子先生が縁を結ばれ、それによって金華における調査の道がひらかれた。これらすべてのみなさんに、衷心よ

り感謝の意を表したい。

金華道情は、前回報告にも述べたとおり、現在、中国の大学においてこれを研究している人がいないようだ。金華道情を主題とする書籍は、管見のおよぶかぎり『金華道情』『金華道情 皇涼傘 双玉球』『金華道情 双珠花』『金華道情攤頭集』のみである。

#### 一 朱順根さんについて

金華道情は、二〇〇八年、国家の無形文化遺産（「非物質文化遺産」）に指定された。現在、中華人民共和国政府から、この藝能の伝承者として、ふたりの人が認定を受けている。義烏の葉英盛さん、そして豊浦の朱順根さんがそれである。ここでは、聞きとり調査および『金華道情』に約三頁にわたって記された文章の情報にもとづき、朱順根さんの人生をたどってみたい。中国における民間の藝能者との交流は、方言の壁のために、現地の人の協力が欠かせないのが通例であるが、金華周辺では、公用中国語で意思疎通が可能であることを、前回報告で述べた。調査では張根芳先生と黄艶笑さんの協力を得る一方、かなり長い時間、ご夫妻の自宅で、ご夫妻と調査者だけですごし、ゆっくりお話しをうかがうことが

できた。

朱順根さんは、一九四二年、午年の暮れ、旧暦十二月二十八日に、両親の長子として、ここ澧浦鎮に生まれた。調査当時の年齢は七十四歳（数え。以下同）であった。父親の名は朱宝万といい、塗装職人（「油漆工」）であった。両親には、朱順根さんのあと、ふたりの妹とひとりの弟が生まれた。朱順根さんの弟はのちに公務員になった。母親は十七歳のときに亡くなった。

朱順根さんは、五歳のときはしか（「麻病」）がもとで、片目の視覚を失った。それで、ずっと家において、弟や妹の面倒を見ていた。十五歳で弟子入りして道情を始めた。父親が将来を案じて決めたのだという。父親の友人に道情をやっている人がいて、この人の弟子になった。夏雲登という人で、これはよく知られた金華道情の藝能者である。

当時、目の不自由な人には、道情の藝能者と、もうひとつ、占い師（「算命先生」）になる道があった。しかし、占い師の弟子になるためには、十石の米が必要であった。朱さんの家は貧しく、これが支払えない。一方の道情は、これよりは少額で、また師匠が父の友人だったため、安くしてもらえたという。夏雲登の弟子は、前

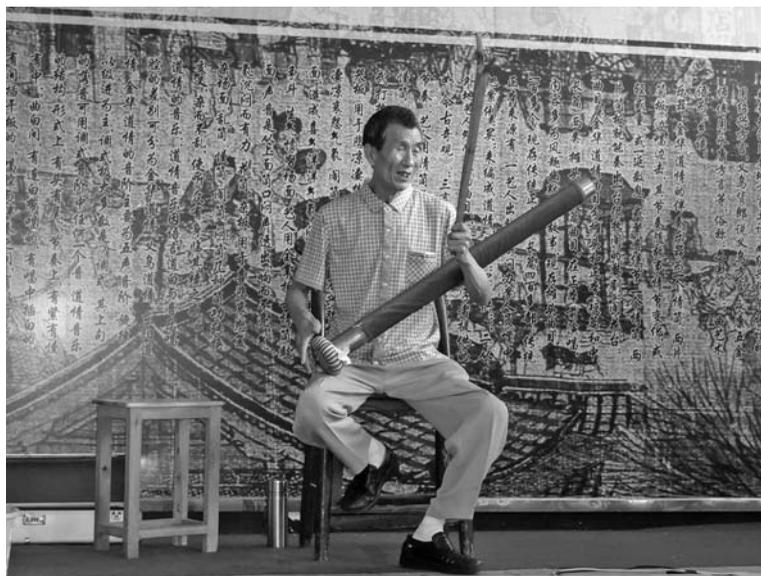


写真1 金華道情をうたい語る朱順根さん1

後、六、七人で、朱順根さんは三番めの弟子であった。

道情は勝手にうたうことはできず、かならずだれかに弟子入りしなければならぬ。朱順根さんに道情の禁忌について質問したとき、唯一返ってきたことは、「一門以外の人からは、盗んじやならぬ藝の道（不是師兄弟、不能儉同行）」だった。この掟は厳しく、同門以外の人の藝をどうしてもまねたかったら、きちんと断らなければならなかった。

弟子入りしてからは、毎日、師匠についてあちこちを回った。師匠のうたうのを聴いて、覚える。朱順根さんは、その日々を、力をこめて「苦」の一字に集約された。さまざまな苦勞があったことと思うが、朱順根さんはとくに、歌詞を覚えなくてはならなかったために、眠れなかったことを言われた。道情の弟子の年季は三年で明ける。朱順根さんも三年たつて独立した。

金華で道情を上演する場合は、過去、大きく分けて二つあった。個人宅と茶館である。個人宅は、子どもの誕生日や長寿者の誕生日（「做寿」）など、祝いごとのとき、宴の席でうたい語って、何がしかのお金をもらう。茶館は、茶や軽食を供する旧中国のいわば喫茶店だが、重要な社交そして娯楽の場でもあり、ここで道情が上演され

ていた。前回報告で述べたレストランでの上演と今回調査で聞きえたこと（後述）から、茶館では、机の上に椅子を置き、藝能者はその椅子に坐つて上演することが通例であったようだ。

朱順根さんは、個人宅ではいちども上演されたことがないという。わたしは、自分の外観が悪いことをよく知っている。そんなわたしが個人宅のおめでたい場に出ていけば、体面を損なう。わたしは体面を重んじる人間だ。だから個人宅には行かなかった。こう説明された。「わたしは体面を重んじる人間だ（我是很愛面子的人）」ということばがとても印象に残る。朱順根さんが道情の傑出した担い手になられたのは、天賦の才に加え、この強い自尊心があつてこそのことだったのである。

現在、朱順根さんは、あとに述べるように、公的な資金を得て、もっぱら積道書場で道情を上演されている。朱順根さんは、公的な場ではまじめな（「正経」）内容をやる。一方、茶館では、「おもしろいものをやつた」という。茶館における道情を、朱順根さんは「飾りがちよつとばかり多い（花多一点鬼）」とか「ぶんぶんいい香りがする（香噴噴）」とかいうことばを使って表現さ

れた。これらには、エロティックな意味が含まれるのだろう。下品にすぎると面子にかかわる、しかし、お客さんが要求すれば、やはり色事が入ってくる。朱順根さんの道情が、そうした内容に頼らなくても聴衆をひきつけられることは、現在の上演において、多くの人びとが熱心に耳を傾けていることが証明している。しかし、安定した収入のない時代、それは、避けがたいことだったのである。さらにいえば、道情におけるエロティックな要素は、負の価値しかもたないわけではない。

朱順根さんの藝術家としての特色を、『金華道情』は「専」「多」「精」の三字で表している<sup>10</sup>。

「専」は、途中、他の職業に就くこともなく、趣味も持たず、ひたすら金華道情だけをうたって、生きてこられたことを示す。これについては、報告者も朱順根さんに確認した。「道情以外に興味などはありますか」と尋ねると、「好きなことが道情だから」と回答された。お酒もたばこも飲まない。トランプも麻雀もやらないということだった。

「多」は、朱順根さんがうたうことのできる演目が、ずば抜けて多いことを指す。金華道情の演目は、短篇（「攤頭」）と長篇（「本篇」）に分かれる。朱さんは、百



写真2 金華道情をうたい語る朱順根さん2

種以上の長篇、百余りの短篇を演じることができ。これは少なく見積もっても百万字を越えるという。その物語りや人物をすべて頭に入れ、声色を使い分けてうたい語られるのである。

「精」は技藝の優れることを指す。金華道情は口の技とともに、漁鼓（「情筒」とも）と呼ばれる長い太鼓をたたく、手の技も重要である。朱順根さんは、これにも優れる。朱順根さんの師匠である夏雲登は、金華随一の漁鼓の名手と呼ばれていた。朱順根さんの漁鼓は、師譲

りで、場面や人物によって変幻自在、漁鼓に巧みに息を吹きかけ、金華の地方劇である婺劇のにぎやかな場面（「鬧花台」）を再現することもできるといふ（報告者は未見）。口の技では、動物の鳴き声や各種の音を上手に似せて出すことができる。しかし、もっとも重要なのは、人物や場面によつて声色や話しかたを使い分け、巧みに描写することである。悲しい場面になると、聴衆は思はず落涙する<sup>11)</sup>。

報告者が金華道情の上演に接した回数は多くなく、朱順根さんの本領を十分に理解できているかわからない。それでも、朱順根さんの道情がすぐれていることはわかる。一つは、後にも述べるように、聴衆が一時間、ほぼ身じろぎもせず、食い入るように朱さんを見ていたからである。聴衆には、近隣の人のみならず、バスに乗つて遠方から聴きに来た人もあった。二つめは、報告者自身が、—金華方言を解さず、今うたわれている内容がわからないにもかかわらず、やはり—ひきつけられたからである。かつて乞食の藝といわれた藝能者が、裁きの場面では、堂々たる裁判官に変化（へんげ）する。このとき、朱順根さんの低いダミ声<sup>12)</sup>が効果を表す。一方、美人は、細くて高い声になる。朱順根さんがしなを作る。し

かし、それが、不思議なことに少しも気にならないどころか、胸に迫るのである。

朱順根さんの道情は、韻を踏まないことがある。これは見方によつては、踏み落としていたのであり、これは理由に、朱順根さんの道情を低く評価する人もあるといふ<sup>12)</sup>。中国の詩やうたが韻を踏むことは当然、自然なことで、通常は考えられている。民間の無名の作者たちが生んだうたと語りによる文学、たとえば宝巻でも、やはり韻を踏む。しかし、朱順根さんの道情によつて、わたしたちは、韻を踏まないうたがあつてよいことを知ることができる。韻を踏むことは、自ずから然るものではなく、やはり文化の型なのである。そして、韻を踏まない朱順根さんの道情が聴衆によつて支持されているということは、また、韻を踏むことが、聴き手にとつて、つまりうたの魅力にとつて、必須のものではないことを示す。このようにことごとしく述べるのは、金華道情、とりわけ朱順根さんの道情には、押韻以外にも、「中国文法」を厚く覆う外皮をまとわない部分があり、そこから、通常わからない何かを知ることができるのではないかと、期待するからである。

朱順根さんは、後継者の育成にも貢献されてきた。お

弟子さんの数は二十数名とうかがった。後に述べる胡雲銭さんが、最後のお弟子さん（「関門弟子」）である。教えるときにもっとも強調することを質問したら、「聴衆に喜んでもらえること」と答えられた。お弟子さんには、目の見えない人も見える人もいるという。どこか違いはあるでしょうか、と尋ねてみた。目の見えない人は文字に頼ることができないので、記憶力にすぐれるといった回答を予測して、問うたのである。しかし、朱順根さんの答えはちがっていた。目の見える人は文字がわかるから（「有文化」）、記憶にもすぐれるし、教えやすいという。文字と無縁の世界で生きてきたとはいえ、朱順根さんは金華道情の藝人者として五十年を生き、名を成された。見えない者は見えない者で、見える者の知らぬ世界があるのだ、という行きかた、考えかたもあるはずだ。けれども、朱順根さんはそうは言われなかった。

朱順根さんに最大の苦労は何でしたかと問うたときも、その答えに少し驚いた。目のこと、貧しさ、あるいはそれらによる他人からの扱い、などの回答を予想していたのだが、「子どもがたくさんいたことだな」と言われた。朱さん夫妻は、困難のなか、男四、女一、五人の子どもを育ててこられたのだった。

朱順根さんのこれまでの生活をつづるまえに、夫人のことをぜひとも述べておきたい。朱必蓮さんは一九三九年生まれ、三つ年上の姉さん女房である。生まれて十四日、肺気腫（「肺腫」）にかかり、片目が見えなくなった。紹介する人があって、朱順根さんと結婚した。朱順根さんはどちらかといえば寡黙で、道情の以外の話しをあまりされない。一方の朱必蓮さんは、小柄で瘦身だがとてもエネルギーシユで、たくさん話しをしてくださった。

夫妻の生活は一貫して貧しく、苦しいものであった。うちはずっと豊浦一の貧乏だったよ、と朱必蓮さんは言われた。いちばん苦しい時は、七日にいちど、うすいお粥が食べられるだけ、そんな時代もあった。明るくたくましい朱必蓮さんのカラリとした語り口に、かえって重みを感じられた。とりわけ困難だったのは、一年代がいまひとつ明確にならなかったが――文化大革命のときと、改革開放の時代に入って茶館がしだいになくなっていった時期のようであった。人民公社の時代には、生産隊からお金が出て、集会（「開会」）の前にうたったりもした。しかし、文化大革命になると、古い文化の破壊運動（「破四旧」）の一環として、金華道情は上演を禁じら

れた。演劇において、限られた革命模範劇（「様板戯」）がくりかえし演じられていたように、道情にも模範道情（「様板道情」）があり、『紅灯記』などが上演されていた。朱順根さんもこうした道情をうたったということだった。しかし、それだけで生きていくのは、困難だったということだろう。

一方の茶館は、この豊浦に、もと十数軒があり、そこを回れば生活ができた。しかし、一九七〇年中期以降、映画やテレビなど新しいメディアが普及しはじめ、茶館が減り始めたという。九十年代にもまだ茶館はあるにはあったが、とても苦しかったようである。この人が道情で稼げないから、わたしが何でも売ったよ。くつ、ざる、ほうき、三輪車にいろいろなものを積んで、どんなに遠くまででも売りに行った。夫の道情をカセットテープにふきこんで、売ったこともある、と言われた。

ここ数年で、生活はうんとよくなった。金華道情の伝承者として国家から公認されたこと、習近平の時代になって、地方の文化政策にたくさんお金が回ってくるようになったこと、が、夫妻の生活を大いに楽にしたようだ。黄艶笑さんによれば、国家級の伝承者である朱順根さんには、一か月あたり千元が給付されているという。

部屋のすみにどっかと陣取った大きな三ドアの冷蔵庫が、生活の向上を示していた。けれども、朱さん夫妻の暮らしは、今もかわらず清貧である。

朱さん夫妻の家は、豊浦鎮の中心、路線バスの小さなターミナルから徒歩一分の至便な場所にある。鎮の中心とはいえ、家の周囲には田畑が広がる。一九八〇年代半ば、報告者は留学中、長距離列車の車窓から農村の家屋をたくさん見た。そして、その中で、人々が何を思い、どのような生活を営んでいるのか、とても知りたいと思った。まさしくそうした家に、夫妻は、およそ三十年間、住みつづけている。これは、朱順根さんのお父さんの建てられた家である。板の壁、床は踏み固められた地面であり、屋根には、ビニールで手当てはされているが、大きな穴があつて、天然の天窓ができていた。電気はあるが、水道とガスはない。旧式のかまどがあり、周囲に燃料の木の葉が散らばっている。手洗いはなく、おまるで用を足す。かっこうがつかないから建て替えたいが、それにはとてもお金がかかると朱必蓮さんは言う。朱順根さんはこの家がいい、と言う。おふたりの長男は早い時期に豊浦のにぎやかな場所にあるアパートに、家を持った。貧しさから人に低く見られることのないよう

に、という思いがあったと、当の長男が話されていた。

朱順根さんは人気があり、他の鎮など、遠方から呼ばれることもある。しかし、最近病気をされてから、濃浦鎮以外での上演は断られているという。長男は、国家公認の伝承者になったのだから、道情をやるなら一回千円くらい取ればいい、と何度も言うのに、親父はきかない、と言われた。平素は、一回出張して上演して報酬は二百五十元であるという。わたしは、調査が長時間にわたったので、張根芳先生の示唆をいれて、調査のための上演に、一日あたり四百元をお支払いした。

謝金をお支払いしたので、署名をいただかなくてはならない。八月には盛根旺さん、十一月には長男に代筆をお願いした。このときにも、朱順根さんは「苦」と力をこめて言われた。文字を知らないつらさは、文字をとおして知ることができない。それをまのあたりにしたのだった。

朱順根さんは、あまりたくさん食べられない。およそ二時間、渾身の力をこめて道情をうたわれるので、かなりのエネルギーを消費されているはずだが、わりあいすぐに食事を終えて、そのまま静かに椅子に座られている。平素の夫妻の食事は質素なものだと推測される。し

かし、わたし（たち）は、食卓せましと並ぶたくさんの料理を楽しませていただいた。お手製のジャンボ餃子がおいしくて、とくに印象に残っている。

おもしろかったのは朱必蓮さんで、部屋の隅にたくさんビールが置いてあり、調査中だからと何度も遠慮したのに、とうとう栓を抜こうとされた。「いりません」と、もういちど強く言ったら、「わたしが飲むんだよ」と返されたのである。七十歳をとおにすぎたのに、坂道もスタスタ上り下りして、濃浦のあちこちを案内して回ってくださった。人に倍する苦勞から汲みだされた元氣は、強くて長持ちすることを証明しているように思われた。

夫妻の清貧は、わたしたちが濃浦を最後に離れたあと、よりはっきりと証明されることになった。遠慮をしたのだが、それまで三回の訪問と同様、朱必蓮さんは、金華特産のお菓子、金華酥餅をたくさんおみやげに持たせてくださった。金華市街地の宿に帰って、小南先生が袋を開けられると、十元札が入っていた。なにかのまがいで紛れて入ったのかとはじめは思ったが、気がついた。調査が終わってから、積道書場で朱必蓮さんもまじえてしばらく雑談をした。そのとき、日本のお金が見てみたいと朱必蓮さんが言われた。まず千円札を出し、興

味深そうに見ておられたので差し上げようかとも思った。しかし、はじめのいいことをするとかえって失礼になる。そこで、次に十円玉を出し、これは有名なお寺のお堂などと説明をしてから、少額であることを強調して、朱必蓮さんにそのまま渡した。十元札はその対価であった。しかし、一元は二十円弱（当時）だから、まったく引き合わない。澧浦に向かって合掌したくなる事件だった。

## 二 積道書場における道情の上演について

朱順根さん夫妻が住む澧浦鎮は、金華市金東区の農村地区にある。鎮は中華人民共和国における村の一級上の地方行政単位である。金華の市街地から澧浦鎮へは路線バスK五一〇の便があり、三、四十分で到着する。報告者は、金華市街地北部の駱家塘地域、暢達街の投宿先、丹楓白露酒店から、まずタクシーで東華家園の北門（バス停の名称は「金東区公安局」）まで行き、そこからこのバスに乗った。東華家園は新開発地に造られたニュータウンで、ここに張根芳先生のお宅がある。

バスは農地のあいだの広い公道を、かなりの高速で走る。しかし、車内はやはり田舎のバス。車掌さんもまじ

え乗客どうし、ときに会話に花が咲く。十一月三日の往路、わたしが準備のために、金華道情『皇涼傘』のテキストを読んでみると、隣席の四十もしくは五十代の女性が「お芝居の脚本みたいだけ何？」と声をかけてきた。道情であること、これからその調査に行くことを説明すると、朱順根なら知っている、わたしも小さいときに道情を聴いた、机の上でやっているから見えなくて、こうやって背伸びして見た、おもしろかった、と話して、聴いた道情の内容も教えてくださった。同じ金東区の曹宅鎮でふたりの子どもが焼死した（あるいは人を焼死させた？）、という事件であった。五分くらいの会話であったが、一九七〇年前後であるう、金華道情の様子を知ることができた。藝能者が机の上に椅子を乗せて坐っていたこと、金華道情が「ニュースうたい（唱新聞）」の機能をもっていたこと、いずれも知っていたが、よもやま話しの名手の口から聴くと、自ら体験したような気持ちになる。

終点の澧浦でバスを降りる。ここは澧浦鎮の中心で、商店が集中して繁華な一帯である。積道書場で道情の上演があるのは市が立つ日なので、とくににぎやかである。路地に入って徒歩三分ほどで積道書場に着く。

途中、大きな廟があった。赫靈廟といい、胡公大帝を主神とする。胡公大帝は金華で盛んに信仰される神格である。胡 (Hu) は狐 (Hu) と音が通じ、もとはキツネの神さまではないかと考えられるが、堂内にキツネにかかわるものはいりだせなかった。旧暦九月六日に大きな祭り (廟会) が開かれ、おびただしい数の人々が集まるという。しかし、この祭りで道情が行われることはない。

金華道情の一大特徴は、上演においても演目の内容においても、宗教性をまったく見出すことができないことである。<sup>(3)</sup>「道情」の「道」は「道教」に由来するから、これは不思議なことと思われる。金華道情がたしかに「道情」であることを示すものは、楽器の漁鼓、そして、この藝能が八仙のひとり、張果老から始まるとされる伝承だけである。最近では中国のあちらこちらに財神の絵が貼られていたり、観音菩薩など大小の仏像が祀られていたりするが、積道書場にはそうしたものも、見えなかった。

宗教について言えば、豊浦訪問の二日め、二〇一五年八月二十八日は、旧暦の七月十五日であった。中元節のこの日、農村へ行けば、死者にたいするなんらかの儀礼

が見られるかもしれないという期待もあってこの日を設定した。しかし、赫靈廟に人のすがたはなく、朱必蓮さんの案内で訪れた大明禪寺という大きな寺でも、特別の儀礼は行われていなかった。

張根芳さんのお話および盛根旺「金華道情的説唱藝術」によれば、金華市金東区では、道情の上演場所として三か所が知られている。孝順鎮の荷風 (和風) 書社、曹宅鎮の北麓書院、そして豊浦鎮の積道書場がそれである。曹宅鎮の北麓書院については、前回報告で紹介した。孝順では週に三日、豊浦と曹宅では十日のうち三日、市の立つ一、四、七の日に道情の上演が行なわれている。積道書場の名は、豊浦鎮を代表する山、積道山に由来する。

積道書場の歴史は新しく、二〇一四年九月から始まる。黄艶笑さんによれば、朱順根さんの最後の弟子、胡雲銭さんが仕掛け人であった。胡雲銭さんは、もと婺劇の役者だが、道情に魅力を感じ、朱順根さんに弟子入りした。胡雲銭さんは、現在、金華市公認の金華道情の伝承者である。師匠である朱順根さんが、年齢も高くなつたことから、あちこち出張して上演するのではなく、固定の上演場所を持つほうがよいと考え、豊浦の中心に、

私財を投じて約四百平米の場所を借り、積道書場を開設した。もともと、聴きにくる人たちからお金を集めようと考えていたようだが、聴衆はおもに退職した人々であり、思うようにはいかなかった。

そのような状況の中、政府が文化政策にたいして積極的に出資するようになった。金華道情の保護の担い手である胡雲銭さんには、二〇一五年に七万元、二〇一六年には六万元が、一時金のかたちで、供与されているという。これらは、一箇所から出ているのではなく、金東区政府や文化站など、いくつかの部門から出資されている。

したがって、上演は、公共サービスの一環として行われていることになる。また、積道書場は聴衆の年齢が高いことから、日本でいうと、地域の高齢者文化センターのイメージである。積道書場では、先述のように、濃浦で市の立つ、旧暦の一、四、七の日、つまり十日に三日、一箇月に九日、午前八時から十時ごろまで、朱順根さんによる道情の上演が行なわれている。旧正月前後、十二月二十四日から元宵節まで休み、一月十七日から再開する。

八月二十七日、はじめに訪問した日は、バスが遅れた



写真3 積道書場と金華道情を聴く人々

り、誤ってひとつ手前のバス停で下車したり、道に迷ったりして、遅れて到着した。すでに短篇がはじまっており、路地を入ると道情の声が聴こえてきた。

路地に面したもつとも広い平土間は、ちようど学校の教室のような空間で、木製の机と椅子が置かれている。入口右手奥に小さな舞台がある。これに、奥の控えの間、物置室、シャワーおよび手洗い室がついている。書場には管理係のような人がひとりおり、この男性が、お茶用のお湯の管理や書場の整理・掃除などを行なっていた。

舞台の上に机と椅子が置かれ、朱順根さんが腰をかけたうたい語っている。右手で漁鼓を打ち、左手は簡板と呼ばれる二本の長い竹板を打ち鳴らす。

お客さんはぎっしり入っている。ふたりがけの机が十五で三十人、壁際に椅子だけで座る人が約十人、そして舞台上に文字どおりかぶりついている人が七人、計五十人ほどの人たちがいた。男女ともいるが、男性が多めである。みな五十五才以上と見えた。しかし、熱気がある。

金華道情に接するようになって、もつとも印象が深いのは、聴衆の熱心さである。中国では、一般に、日本にくらべ、私語や携帯電話の呼びだし音や通話の声にたい

し、人々は寛容あるいはルーズであるといっている。このことは、演劇など藝能の場にもあてはまる。しかし、金華道情では、私語や携帯電話の鳴動が起こつて、人々の視線が集まる場面を複数回、目にした。携帯電話が鳴って、通話のために室外に出た人もいた。うしろのほうで寝ている人を見かけることはあり、人の出入りもあつたが、総体に、人々は静かに耳を傾けつづけている。「道情藝人 口開きや 二本の脚に 根が生える〔唱新聞人一開口 両脚生根不会走〕<sup>(1)</sup>」ということばが誇張ではないことがよくわかる。

積道書場の入り口正面、会場側面上部に黒板があり、以下のように記されていた。

今日演唱

本日の出し物

《天寶図》

『天寶図』

由朱順根艺人演唱

うたと語り 朱順根

时间八点正

八時開演

道情は午前八時に始まり、十時ごろ終わる。

到着して六分ほどすると、道情がとぎれて休憩に入った。「枕」である短篇が終わつたのだ。そして九時より

少しまえ正篇『天宝物』が始まった。それから終了まで一時間余り、人々はまた静かに道情を聴いていた。そして、道情の終了とともに、ほぼすべての人がさっと席を立って積道書場をあとにした。道情の終了後、今日の出し物はどうだったとか、おまえの息子の商売はどうだとか、よもやま話がありそうなのだが、聴衆相互の交流も、聴衆と藝人者との交流も、まったく見られない。これは、積道書場における朱順根さん上演の二回ともがそうであっただけではなく、前回報告した曹宅、北麓書院でも同じだったが、とても不思議なことと思われる。人々が去ったあとは、管理係の人が、椅子を机の上上げ、掃除をして、それで終わりである。朱順根さんは漁鼓と簡板とを積道書場に置き、自分で鍵をかけて帰宅された。

### 三 金華道情の演目について

— 『皇涼傘』『屁っこき張の子豚売り』ほか—

ここでは、調査において朱順根さんが上演された金華道情の演目の内容について、紹介と若干の分析・考察を行ないたい。もとは撮影した動画を張根芳先生に提供し、それを文字に起こしていただいて検討する予定であ

った。しかし、この作業は、現地の人でも簡単にはできず、膨大な時間と労力を必要とする。よって、この依頼は遂行されなかった。それは、法外の依頼をした報告者の側に非があつたのである。このため、以下の演目については不明な箇所も多い。しかし、金華道情の報告や論文が不足している状況に鑑み、「疑わしきを欠く」方針を採用せず、不明な部分を含む場合も、不明であることとを明記して報告することにした。後日を期すとともに、教えを待ちたいと思う。

報告者が上演に接した演目を、以下にもういちどまとめて記す。

#### A 短篇

a 朱順根さんが演目を決められ定期的上演として演じられたもの

1 「包公と牛の舌盗人」(八月二十七日)

2 「賢い嫁の話」(十一月二日)

b 調査者の依頼により演じられたもの

3 「夫婦の手紙(夫妻通信)」(十一月三日)

4 「屁っこき張の子豚売り(張百屁売小猪)」(十

一月三日)

B 長篇

a 朱順根さんが演目を決められ定期の上演として演じられたもの

5 『天宝物』（二部）（八月二十七日、十一月二日）

b 調査者の依頼により演じられたもの

6 『尼姑記』（全部）（八月二十八日）

7 『皇涼傘』（一部）（十一月三日）

以下、順に紹介する。

1 「包公と牛の舌盗人」

二〇一五年八月二十七日、積道書場における定期の上演の「枕」として、朱順根さんが演じられた短篇である。

包公すなわち包拯（諱・本名）は、中国の民間伝承中の主要人物のひとつである。北宋、仁宗皇帝の時代に実在して、清官として知られ、死後、その行跡が伝説化された。包公の裁きをめぐる物語りは早く元雜劇に見え、『清平山堂話本』や『警世通言』にも収録されている。明代の小説『百花公案』は「包公もの」の集大成である。京劇ほか地方伝統劇にも頻繁に登場し、広く知られる。公平無私で皇帝の権力にも屈しない。昼はこの世を

裁き、夜はあの世を裁いて、非業の死をとげた人々を救い出す。サスペンスとしてのおもしろさも加わり、人々のあいだでたいへん人気がある。

包拯が牛の舌を盗んだ人を捉えるこの話は、正史である『宋史』卷三一六・包拯伝に見える。

知天長県、有盜割人牛舌者。主来訴、拯曰、第婦、殺而鬻之。尋復有来告私殺牛、拯曰、何為割牛舌而又告之。盜驚服。

（包拯が）天長県の知県となった。人の牛の舌を切つて盗んだ者がいた。牛の持ち主が訴え出た。包拯は言った。「家に帰つて牛を殺し、（肉を）売ちなさい。」その後、こっそり牛を殺した者がいると、また訴え出る者がいた。包拯は言った。「おまえは牛の舌を切つておいて、なぜまた（牛を殺した者を）訴えるのだ。」盗人は驚いて承服した。

正史で四十字あまりのこの話柄を、朱順根さんはおそらく約三十分をかけてうたい語られた<sup>15)</sup>。朱順根さんが何をどのようにつけ加えて、この話を豊かにされたのか、無念であるが、目下、知ることができない。

## 2 「賢い嫁の話」

二〇一五年十一月二日、積道書場における定期の上演として、朱順根さんが演じられた。この話については、上演後に朱順根さんに説明していただいた。また、不明箇所があったため、後日、もういちど説明をお願いした。このときは黄艶笑さんの協力を得た。「」は二度めの説明に現れなかった部分を示す。それは以下のような内容であった。

ある貧家の娘が金持ちの家に嫁いだ。娘は聡明だった（ので、他の人は高く評価していた）が、舅と姑と夫は、嫁の実家が貧しいことから、嫁をないがしろにした。

この家は農家だったので、毎年、年越しのとき、鶏を屠つて田の神夫婦（「田公田婆」）に祈りを捧げることになっていた。年の瀬に、この嫁の実家から父母がやって来た。娘が忙しくて里帰りのひまがないので、会いにきたのだった。娘はそこで、鶏の胃（発音 zong 1）をこっそり父親の酒の「あて」に出した。

父母が帰ったあと、舅と姑は、嫁の実家が貧しいことから、父母が何か持ち去ったのではないかと疑い、鶏の胃がないことを発見した。嫁はもともとなかったと言った。

田の神夫婦には、娘がひとり祈りを捧げた。夫が木陰でこっそりそれを見ていた。鶏の胃を欠いているので、都合が悪い。そこで、娘はこう祈った。「今年は春がないけれど、来年ふたつ春が来る（今年没有春 明年「両頭春」）。春は立春を指し、これは、今年は立春後に年が明けたので立春がなかったが、来年は閏月があり、年の初めと終わりの両方に立春があるという意味であった。しかし、じつは「春」と鶏の胃を指すことばの発音が似ており、今年が胃がないが、来年はふたつ胃を供えるので、大目に見て、ご加護をお願いしますという意味だった。

夫はうまいことを言うと感じ、おもしろくて木陰で笑った。すると、娘は、田の神夫婦が笑ったのだと思ひ、「笑わないでください（不能笑）」と言った。これは、「笑」と「少」の発音が似ていて、つまり、来年の収穫を少なくしないでほしい、という意味にもなった。「娘はけっきょく実家に返された。すると、この家の長期の雇人（「長工」）たちが、あのようによくお嫁さんが帰って来ないなら、自分たちもここで働くのをやめると言い出した。そこで、嫁を呼び返した。」このときから、舅と姑と夫も、この嫁を大事にするようになった。

金華道情に宗教性がないことは、先に述べた。しかし、金華道情は娯楽一色というわけでもない。とりわけ、勧善の性格をもつ話しは多い。この話しも、貧しい者をばかにしてはいけないという点では、教訓を含んでいる。担い手が貧者であったことから、道情の内容は概して貧者に暖かい<sup>17</sup>。しかし、この娘は鶏の胃を取って父親に食べさせておきながら、取っていないと嘘をつく。道徳よりも機知を示すことに重きが置かれているようである。

### 3 「夫婦の手紙（夫妻通信）」

二〇一五年十一月三日、調査者が演目を選択して朱根さんに依頼、これに応じて調査のために演じてくださった。この演目は、朱根根さんの上演にもとづいて、盛根旺さん<sup>18</sup>が書きとめられ、張根芳先生が整理されたテキストがあり、それを磯部祐子先生が翻訳したうえで分析・考察されている<sup>19</sup>。これは以下のような滑稽艶笑譚である。

一組の若夫婦がいた。ふたりとも働き者で、夫（阿龍）は腕のよい職人だった。夫は出稼ぎに出ており、仕事が多忙しくてもう三年、家に帰っていない。手紙やお金

は届くが、妻は身体の具合が悪くなるほど、夫を待ち焦がれている。まもなく正月だが、親方は今年も夫の帰郷を許さず、家に手紙を書けと言う。夫は字が書けず、平素は仲間の職人に手紙の代筆を頼んでいるが、その仲間も今年も正月の休暇ですでに帰郷している。他の人に頼むのも恥ずかしく、夫は自分で手紙を書くことにした。夫は次のように書きたいと考えた。

高山流水叮嚀響　高い山に水は流れ　チャプチャプ

と音をたてる

一路走来一路想　歩きながら考えた

三年不見妻子面　三年拜まぬ　女房の顔

見到妻子詳細講　会ったらつもる話をしよう

ところが、思い出せない字があったので、じつさいには次のように書いた。

高山流水叮嚀〇　／　一路走来一路〇　／　三年不見

妻子〇　／　見到妻子〇〇〇

受け取った妻も字が読めないので、教師をしている張

さんに頼むと、張さんは、○のところを「圈(まる)」と読み、意味がわからないと言う。妻はそんなはずはないと怒り、今度は番頭をしている人(「管賬的」)に頼む。その人は、○を「籬(たが)」と読んだ。妻はまた怒る。帰宅すると、親しい革職人が家の前にいた。革職人はいきさつを聞き、自分が読もうと言う。妻は、字が読めないはずだが、と疑うが、革職人は読んで、解釈までする。それは、○を「洞(あな)」と読む、性的なふざけた解釈だった。

ついで革職人は、これを夫が読めばすぐ帰ってくるという返事を、妻のために書いた。

日落西山一点黑 西山にお日さま沈んで 暗くなる  
儂弗帰来有別箇 あんたが帰ってこなければ 他に

もいるわ

一夜来他有十箇 一晚十人  
十夜便来百来箇 十夜で百人

親方にこれを読んでもらった亭主は、親方がとめるのも聞かず、すぐに帰宅した。家に着くと夫婦喧嘩になったが、近所の人がとりなし、また正月二日、革職人が来

て説明したので、すべてがまるくおさまった。そうして、三人、酒食をともしして、文字を知らないことはつらいこと、息子や娘には勉強をさせなくてはならない、と話したのだった。

全篇、うたの部分を除くと、快速のセリフのやりとりで進む。滑稽艶笑譚だが、夫婦の真情が基調になっており、暖かさがある。じっさいに、出稼ぎに送り出した、あるいは送り出された配偶者たちには、また切実なものでもあっただろう。

この短篇から、いくつかのことがわかることができる。一つは金華道情における艶笑譚あるいは広く性的な内容との問題である。金華道情には、性的な内容を含むものが多い。これは、この「夫婦の手紙」だけでなく、他の演目からも知ることができる。あるいは、金華道情は、性的な内容を含んでいたことを隠蔽していない、と言うべきかもしれない。こうした部分は、他の文化でも多かれ少なかれそのようなところがないわけではないであろうが、とくに中国では、文字に書きとめられるときに消えてしまいやすく、実態がよくわからない。資料としての価値を認めて、活字にした人たちに感謝したいと思う。<sup>20)</sup>

二つめは、この道情の終わりにみえる、金華道情と、文字を知らない人たちの苦しみの問題である。

事干三家対面講清楚

三人向かい合って きちんと話す

擺上酒菜談今來講古

酒と料理を前に並べ 語るは今や昔のこと

講來講去嘸文化苦

あれこれ話して 字を知らないのはやっぱりつらい

有兒囡 弗可弗讀書

息子 娘にゃ かならず学問させねばならぬ

湯攤頭マ小戲原是編

この短篇の道情は 小さな作り話だが

唱唱聽聽要記落肚

うたって聴いて しっかり覚えてくださいな

代代兒孫要讀書

孫子(まご)の代もその先も きつと学問させなさい

小小灘頭唱完成

短篇道情 もうおしまい 今日はいままで

嘸嘸嘸

ボンボンボン……

この道情の中でも、現実の生活でも、朱順根さんは「不識字」ではなく「没文化」と言われる。その肺腑の底から湧きあがる「苦」が、ここでは笑いの中で表現されている。この道情で笑わせる人、笑う人、ほとんどが字を知らなかったはずである。この笑いの滋味を、文字を知る者は理解することができるだろうか。

『金華道情攤頭集』の「夫婦の手紙」は全篇六頁弱である。この書物は一頁二十九行、一行二十二字で作られているから、六頁すべてが文字で埋まっていたとしても、計三三二八字である。一方、朱順根さんが「夫婦の手紙」を演じられた時間は、四十分であった。道情は伝統劇とは異なり、一字の長さをうんと伸ばしてうたりすることはない。逆に、とても快速で進んでいく。文字に起こされたテキストは、だから、上演されたことばをそのまま写したものはあり得ない。じっさいには、『金華道情攤頭集』のテキストの少なくとも数倍、数十倍のことばが、朱順根さんの口から紡ぎだされている。だから文字に起こされたテキストによるこの報告は、十全なものではない。そのことを、ここで再度述べておきたい。

#### 4 「屁っこき張の子豚売り」

二〇一五年十一月三日、調査者が演目を選択して朱根さんに依頼、これに応じて調査のために演じてくださった。これについても、朱根根さんの上演を、盛根旺さんが記録され、張根芳先生の整理されたテキストがある。<sup>(2)</sup>これは艶笑譚ではなく尾籠な話だが、やはり明るい。この話しについては、金華の方言も含め、不明な点について張根芳先生が報告者の質問に、ひとつひとつ答えてくださった。

ある五十戸ばかりの村に張啓という人がいた。愛称は「屁っこき張（張百屁）」。人から何でも借りるくせに、自分は決して人に貸さない、という人で、みなからばかにされていた。

その年の五月、飼っていた母豚が子を産んだので、屁っこき張は子豚を四頭、市に売りに行くことにした。途上、早朝のこととて、露で「猿股」が湿めり、腿に貼っついて気持ちが悪い。屁っこき張は猿股しか穿いていなかったが、まだ暗く、行き交う人もないことから、しばらく行ったらまた考えようと、とりあえず猿股を脱いで下半身裸になり、猿股は天秤棒にひっかけて、道を急いだ。

気持ちよく自分で作ったでたらめな曲をうたいながら歩いていると、路傍の豆の茎が豚を入れた籠にひっかかり、はねかえった反動で、屁っこき張の大事なところを直撃、張は痛さに涙した。そこで猿股を穿こうとしたが、猿股がない。風にとばされたか、この姿では市にも行けず、かといって家に引き返すのも便利が悪い、と困っていると、すぐ先の木に猿股がひっかかっていた。ありがたや、と、屁っこき張はこれを拝借して穿き、また市へ向かった。

この猿股、夜明け前から近くの田んぼで溝を掘る作業をしていた男のもので、男は暑いし楽なので、脱いで仕事をしていたのだった。男は猿股がなくなつたので、蓮池で蓮の葉を取り、それで隠して家に帰った。

男は屁っこき張が豚を持って通りかかったのを知っていたので、きつと屁っこき張が盗んだのだと考え、屁っこき張を追った。渡し場まで来ると船があつたので、船頭に尋ねると、屁っこき張はさっきの第一便で渡つたばかりだ、子豚が二匹まだ船に残っているとと言う。男は屁っこき張を見つけ、猿股を返せと迫る。しかし、屁っこき張は、これはおれの猿股だ、猿股も穿かずに豚を売りに行く奴がいるか、と切り返した上、男にびんたを食ら

わせる。船に乗り合わせた人々も、それはもつともだ、と屁っこき張に加勢した。男のほうも、猿股は自分のものに似ているが、同じような猿股は多い、そのうえ屁っこき張はほかに猿股を持ち合わせてはいないから、あれはやっぱ屁っこき張のものかもしれない、と、すぐすぐ引き下がりに家へ帰った。

男は帰宅すると、こんどは女房に、猿股を人に取られて人前にのこのこ出ていくとは何と恥知らずな、と罵られた。

一方、屁っこき張は子豚が高く売れたので、意気揚々と帰宅し、女房に猿股の一件を話した。すると女房は屁っこき張を叱責し、すぐに猿股を脱げ、相手がどこのだれか、渡し場へ行って調べてこいと命じた。屁っこき張は、船に乗り合わせた人たちから、男が大水村の水豆腐という者だと聞いていたので、そう答えた。女房は猿股を洗って乾かし、翌日、屁っこき張はその猿股を、大水村まで届けに行った。

屁っこき張は、昨日は人がたくさんいたし、あんたは猿股を穿いていたから、失礼をした。今日はお詫びにやってきた。猿股はやはり脱いではいけない。おまえさんとおれは同じような気性らしいと話した。こうしてふた

りは意気投合し、それからは仲のよい友だちになった。

全篇あつけらかんとした、短篇ならではの楽しい話である。この話のはじめに、屁っこき張がみなからばかにされていることが述べられているが、この話には、屁っこき張が嫌われ者であることは、とくに示されない。むしろみなが屁っこき張に味方をしている。このお話しでは、善悪は度外視されているようだ。突拍子もないことをし、嘘をつき、女房からは罵られ、それでもそのお話しが、人から愛される。これはたとえば、ドイツのテイル・オイレンシュピーゲルを思いださせる。

金華道情には、こうした定番のトリックスターが複数いるようである。『金華道情攤頭集』には、「王四郎（王老四）」や「ちっこい畢（畢矮）」が登場する短篇が複数収録されている。

中国文化史においては、文字として表わされた文章が、逆に何かを覆う厚い皮膜のように感じられることがある。そしてその膜は、ある一定の要素にたいして、まったくあるいはほとんど透過性をもたない。

しかし、先の「夫婦の手紙」やこの「屁っこき張の豚売り」からわかるように、文字による干渉をほとんど受けていない金華道情は、その覆いから、かなり自由であ

るようだ。性にかかわることがらが、大らかに表現される。破壊的なトリックスターもすがたを現す。したがって、中国以外の世界の類話と、そのまま同じ場所に並べて、比較することも可能になるかもしれない。単なる娯楽のようでも、それによってわたしたちは何か未知のことを知ることができるのではないか。報告者が金華道情に強く惹きつけられる大きな理由のひとつは、この期待にある。

## 5 『天宝库』

二〇一五年八月二十七日および十一月二日、積道書場における定期の上演として、朱順根さんが演じられた。

これは大長篇で、上演には一年以上の時間がかかるという聞いていた。のちに朱順根さんに確認すると、二〇一五年一月から二〇一六年六月まで、一年半をかけて、この長篇を演じられたということだった。朱順根さんの上演は、先に述べたように一か月（旧暦）に九日である。一日一時間の上演として、約半月の休みを入れても、計一五〇時間以上にわたり、『天宝库』を演じられたことになる。章回小説一五〇回分が頭の中に入っていて、しかもそれを瞬時に取り出し、簡板と漁鼓を鳴らしながら、

即興をまじえて、というよりは即興で演じる。至藝である。

『天宝库』の梗概を、朱順根さんの紹介によって示す。かなり簡略であるが、次のようなお話しであるという。

これは、忠臣と奸臣の闘争の物語りである。時代は元朝の武宗皇帝から仁宗皇帝のときのことである。忠臣の代表は蘇定国、奸臣の代表は花登雲である。皇帝は新疆にある鄯善（単単とも）国討伐のために蘇定国を派遣し、蘇定国はこれに勝利した。しかし、鄯善国の王は安南国（ベトナム）に逃れた。そこで、蘇定国は安南国討伐に赴き、また勝利を収めた。蘇定国は晋国大將軍となり、諸侯に封じられた。晋国と安南国は、不戦の協議をし、安南国は晋国に朝貢することになった。安南国の貢物に「天宝库」があった。これは、も天上の南天門の横に立てられていた大きな旗で、風に吹かれて地上の安南国に落ちてきたものだと言えられていた。天上世界の地図が描かれ、図上に二十八宿も見える。この二十八宿が地上に降りて、人として生まれ、晋国の二十八人の忠臣となる。これに加え、物語り中には計二〇八人の忠臣が登場する。奸臣十三人は外国に逃走するが、捕まっても連れもどされ、死刑になる。こうして、晋国は安泰とな

る。

『天寶図』には統篇『地宝図』があるという。

『天寶図』は、また『天豹図』とも記され、京劇などの伝統演劇や小説に見られる。『大元義侠传 天寶図』は、元の武宗期から仁宗期、奸臣の花登雲が忠臣の蘇定国を陥れる話であるといい、朱順根さんの道情に近そうである。しかし、この小説は、蘇定国の一男一女および蘇家と親しい施家の一男一女の流離と、これらの人びとが山寨へ集合し、花登雲父子に復讐を遂げることが本筋になっている。<sup>22</sup> また、嘉慶十九（一八一四）年刊の小説『天豹図』、一名『劍侠飛仙天豹図』があり、これも花家の父子が施一家を陥れ、施家の一男一女が山寨へ上り、花家父子に復讐を遂げる話である。しかし、時代が明の成化年間に設定され、人名も変わり、また不倫など男女の話題も加わり、登場人物や事件が増えている。<sup>23</sup> 京劇『天寶図』も、また、明代の成化年間に時代設定され、小説『天豹図』に近い。<sup>24</sup>

『天寶図』は、「評書」や「弾詞」などうたと語りの藝能で盛んに行われているようであり、金華道情『天寶図』はそれらとのかかわりのなかで生まれたものと考えられる。逆にいえば、この演目を糸口にして、金華道情

と他の藝能・文学との関係が明らかになる可能性がある。

報告者はこうした広がりには長いあいだ気がつかず、したがって、本報告では、『天寶図』について、これ以上のことを述べることができない。また、この章「3 金華道情の演目について」の最初に述べたとおりの理由で、調査において聴いたのが『天寶図』のどの部分かも、今回明らかにできていない。はなはだ不備であるが、後日を期したいと思う。

## 6 『尼姑記』（全部）

二〇一五年八月二十八日、報告者が一日で全本が終わる長篇の上演を朱順根さんに依頼したところ、朱順根さんがこの演目を選択して、演じてくださった。これは『天寶図』と異なり、三日で演じることができるといふ。この話しの内容は、朱順根さんに二回にわたって説明していただいた。二回めは、黄艶笑さんも協力をお願いした。

『尼姑記』は金華のお話である。時代は清のこと、金華の東門、つまり旌孝門、通称義鳥門のそばに遊雑街という通りがあり、そこで起こったことだといふ。<sup>25</sup> ここ

に、劉炳金と劉炳銀、ふたりの兄弟が住んでいた。劉炳金は役所で使い走り（「当差」）をしていた。妻との間に三人の娘、劉金蘭、劉銀蘭、劉宝蘭がおり、さらに、養子としてもらいうけた息子、朱小狗（「小狗」は小犬の意）が一人あった。一方、弟の劉炳銀には、妻も子どももなかった。

ある正月、劉炳金が不在の折、劉炳金の家に隣人の娘婿がやってきた。三人の娘は平素階上ですごしていたが、娘婿にたいへん興味をもち、こっそりのぞき見をした。そこに、劉炳金が役所から帰ってきて、娘たちのはしたない行動を叱りつけた。娘たちはしかたなく部屋にもどり、劉炳金も階上上がった。劉炳金は、そろそろ娘たちを嫁がせるときがきたと考え、「おまえたちの結婚の相手はもう決めている」と嘘をつき、それぞれの夫にはこんな欠点あんな欠点があると、でまかせを言った。それを聞いて三人の娘は結婚したくないと言ったが、劉炳金はどうあつても結婚しろと言いつつ張った。

時はすぎて、二月二日の夜、劉炳金の妻、つまり三人の娘の母親は、息子、朱小狗を連れて、通済橋の南市街まで芝居見物に出かけた。劉炳金は役所へ行った。娘たちは家にだれもいなくなったので、これに乗り、男装を

して家を出た。行く先は天台山で、尼になろうとしたのである。

さて、劉炳金と劉炳奎の兄弟は、親の亡きあと平等に財産を分けたのだが、劉炳奎は賭博でこれを使い果たし、貧乏をしていた。三人の娘は遠く知らない道のりを行かなくてはならないことから、それぞれ五両ずつ、合計十五両を出して、劉炳奎に付き添いを依頼した。夜、東関を抜け、そこから三里のところまで夜が明けた。劉炳奎は、腹が痛くなつたので用を足したいと言ひ、三人の姪を先に行かせた。劉炳奎は姪の家出を助けるのはまづいと思つてうそをつき、十五両をそっくり持つて引き返したのである。

母親が芝居見物から帰つてくると、三人の娘の姿が見えない。一方の息子も出先で百文の銅銭をもたせて買ひ物にやつたまま、もどつて来なかつた。じつは息子は、買ひ物の途上、通済橋の下で賭場が開かれているところに通りかかった。賭場にはまだ客がおらず、息子はサクラをしてほしい、負けても金は取らない、と声をかけられ、それに従つた。ところが、負けるとやはり百文そっくり取られた。このままでは父親に怒られるだけだと、戻らなかつたのだつた。

夜が明けてから、劉炳金の隣人が役所に届け出た。劉炳金は、養子の息子が三人の娘を連れて逃げたと訴えた。息子は親戚の家に逃げていたが、劉炳金が探し出し、捕まえて役所に差し出した。

さて、息子、朱小狗の友人（「同年」）に、黄小狗という人がおり、このことを知って、朱小狗に会いに行つた。朱小狗に三人の娘を連れ出したのかと尋ねると、そんなことはしていないと言う。しかし、父親の劉炳金は、息子が連れ出したのだと言い張る。黄小狗の父親は弁護士だったので、黄小狗は父親に相談した。父親は証拠がなければ訴状は書けない、と言う。証拠を探したいという黄小狗に、父親は、それなら、夢で閻魔大王に会い、三人の娘がどこにいるか教えてもらおうとよいと助言する。

そこで、黄小狗は金華府の城隍廟へ行き、城隍神（町の守り神で、この世だけでなくあの世も統括する）に、ここで眠るので娘たちがどこにいるか教えてほしいと祈りを捧げ、横になった。

一晩めは一睡もできなかったが、二晩めは眠りについた。夢の中で閻魔大王は、「三人の娘を連れもどせば真実がわかる」と言う。黄小狗が、どうして探せばよいの

かと問うたところ、閻魔大王は「天上へ行くのじゃ」と答える。黄小狗は眠りから醒めたが、意味がわからず途方に暮れた。これを父親に話したところ、父親が天台へ行けという意味であることを見破った。そこで、黄小狗は天台へ向かった。

義鳥まで来て宿屋に泊まると、黄小狗は呉小狗という若者に出会った。この若者は、でんでん太鼓を鳴らして雑貨を売り歩く商人だった。ところが、売り物があまりない。そのわけを問うと、雑貨売りは副業で人探しが本業だと言う。そうして、呉小狗は、三人の娘なら自分の家に泊まったと教える。自分の母親が娘たちを見たが、その母は首を吊って死んでしまったのだと言う。

呉小狗の父は博徒であった。この父が三人の娘が女であることを見破り、殺して金を取ろうとした。この日、父親が酒をふだんより多く飲んでいたので、母親がどうしてそんなに飲むのか、と尋ねると、父親は酔いにまかせて計画を話した。母親はこれを知って、娘たちをこっそり逃がした。そして、ことが知れたら夫に殴られるにちがいないと思い、首を吊ったのだった。

夜が明けて父親が酔いから醒めた。呉小狗はこれまで起こったことをまったく知らなかったが、父親は呉小狗

のせいだと思ひ、呉小狗の足をたたき折つてしまつた。隣人がこのことを地保（地元の治安係）に訴え、地保が調査をして、これを県の役所に報告した。県では父親を捕らえて裁判を行つた。呉小狗がなぜこうなつたのかわからないと言つたので、父親を尋問したが、罪を認めない。そこで、父親をこんどは拷問にかけると、二度めに自白した。呉小狗は家に戻り、県の役所は父親に死刑の判決をくだした。

呉小狗と黄小狗が、また偶然に出会つた。呉小狗は黄小狗に、これまでに起つたことを説明した。黄小狗は呉小狗といっしょに天台へ行くことにした。東陽県まで来て、宿屋の前を通りかかると、戸口でひとりの老婆が涙を流している。泊まつてよいか尋ねると、今日はだめだと答えた。泊まれるはずだ、なぜ泣いているのか、呉小狗と黄小狗が問うていると、人が通りかかり、この家で人死に出たのだ、尋ねてやるなど言う。じつは、この宿にも三人の娘が泊まり、老婆の夫が女であることを見破り、やはり殺して金を取るうとしたのだつた。妻である老婆はこれを知り、それを止めてけんかになつた。妻は逃げ、夫が追ひ、家の菜園まで来た。菜園には井戸があり、夫が妻である老婆を突き落とそうとしたとこ

ろ、誤つて自分が落ちてしまつた。老婆は役所に通報し、この経緯を説明した。このために泣いていたのである。

この家に蘇蘭という娘がひとりいた。この娘が天台まで三人娘について行つた。黄小狗と呉小狗は天台に着き、三人娘を探し出して連れ戻した。黄小狗は役所まで行き、経緯をすべて説明した。役所は、でまかせを言つた罪で、劉炳金を三年の刑に処した。

以上が『尼姑記』の全部である。

『尼姑記』という題名ですぐ連想されるのは、尼さんの恋の物語りである。尼さんが恋をして還俗する話や、逆に俗人が恋のいざこざから尼になる話しは、頻見される。しかし、この道情は『尼姑記』と題されながら、尼がひとりも登場しない。物語りの中にも、理屈に合わないところがたくさんある。人々の行動が首尾一貫しない。登場人物のうち、結末がはっきりしているのは、死んだ妻と夫そして劉炳金だけである。

しかし、不思議なおもしろさがある。この話しは朱順根さんに説明していただいた。物語りの説明は道情とは異なり、うまくいくか多少心配していたが、杞憂であつた。朱順根さんの語りが巧みで、うたがなくても、せり

ふはなくとも、しだいに引きこまれていった。

上演時間は計二百分であった。一日一時間あまりの上演で三日ということになる。あとで気がついたが、これを一日で演じることをお願いしたのは、朱順根さんの年齢からしたいへん申しわけないことであった。しかし、朱順根さんは藝の質を落とすことなく演じとおされた。

## 7 『皇涼傘』（一部）

二〇一五年十一月三日、調査者が演目を選択して朱順根さんに依頼、これに応じて調査のために演じてくださった。この演目は、先にも述べたように、朱順根さんの上演を、盛根旺さんが書きとめられ、張根芳先生が整理されたテキストがある。

『皇涼傘』は、清末、金華に実在した大富豪で慈善家の黄松山を主人公とする。黄松山の英雄物語りのようでもあり、また、黄松山を徹底的にこきおろすようでもあり、中国の民間文学によくある話と違うのではない、たいへん興味深い内容をもっている。物語りは、黄松山と、黄松山が手をつけた人妻の金家、金家のもとの浮気の相手である武挙人の陳思揚、そして陳思揚とはりあう

腕つぶしをもつ黄松山の母方おじ厳奶奶の四人を中心に展開する。この中から、主人公の黄松山が、金家をはじめて訪ねる場面を、調査者が選択して演じていただいた。

『皇涼傘』は以下のような話である。

清末、咸豊帝のとき、金華の塘雅に、黄松山という人がいた。黄松山は金華一の大富豪で、庶民の身分ではあったが、同治帝のとき、朝廷に十万両を貢納し、皇帝から皇涼傘を下賜された。皇涼傘は皇帝の権威を象徴し、これをもつ黄松山には相当の権威が与えられる。

黄松山には七人の美しい妻がおり、その交わりをいつも帳簿につけていた。ところが、たった一日帳簿につけ忘れたその日に正妻の嚴氏が受胎し、黄松山は産まれた男児を自分の子ではないと思いきみ、正妻を責めさいなむ。正妻はたまりかねて、とうとう男児を殺し、また、この子が黄松山の子どもなら、黄松山の後は絶えよ、と言ったことから、黄松山の七人の妻は、だれも男児を生まなかつた。

さて、黄松山はある日、市古井（地名）の天羅（金華方言で「へちま」の意）の妻、金家（金瓜）すなわち「かぼちゃ」の意）が、自分の七人の妻より美しいと使

用人たちが噂するのを聞き、金家を訪ねて、その美しさに迷い、すぐ手をつけてしまふ。金家には、夫の天羅以外に、十六歳のときから懇ろになつてゐる陳思揚という男がいた。陳思揚は武拳人で腕つぶしがめつぼう強い。一方、黄松山の正妻の父で、母方のおじでもある人に、乱暴者の嚴奶奶がいた。

黄松山が金家をはじめ訪れたとき、陳思揚がやつてきたので、黄松山は身を隠すため、あわてて便所の甕に入り、全身糞まみれになつた。嚴奶奶は、この屈辱の復讐をしなければならぬと考へた。そこで、塘雅の芝居に金家と天羅夫妻を呼び、陳思揚をおびき出して、陳思揚一党をこてんぱんにやつつけた。この間、金家は黄松山と懇ろになりながら、陳思揚や天羅に、黄松山は権勢があつてさからえないのでがまんするように説く。

さて、こんどは孝順で芝居がかかることになり、陳思揚は黄松山が来たら復讐をしようと思つた。嚴奶奶は気が乗らない黄松山を誘ひ、孝順の芝居に出かけて、悶着を起こし、陳思揚を川に落とした。黄松山は金家と天羅夫妻を陳思揚から守るため、自分の一族の墓のある渠盤塘に呼び寄せ、農地などを与えて生活できるようにした。

陳思揚が渠盤塘にやつてきたので、黄松山が「泥棒だ」と人を集めると、人々は陳思揚を木に吊り下げて思いつき打ちすえた。陳思揚が足の筋を切つたので、黄松山は陳思揚をそのまま滞在させ、金家に傷が癒えるまで世話をするように言う。陳思揚の家ではこれを知つて、息子たちが渠盤塘に来て、陳思揚を連れ帰つた。

陳思揚が家に戻つて数か月、ようやく歩けるようになると、金華府に事件を訴へることにした。金華府の長である金華知府の趙榮青は、皇涼傘と武拳人の争いに頭を悩ませる。知府は天羅を証人として呼び寄せ、天羅は、陳思揚の刀と持つていた三百両を証拠として、陳思揚がこれで妻を脅そつとしたと証言した。知府が天羅の証言を信じるので、陳思揚は上告しようとするが、知府は、皇涼傘の黄松山と争つと命を落とすことになる、忠告する。

嚴奶奶と黄松山が、孝順の無量寺に参詣に行くことになつた。皇涼傘を持つていくことにしたので、役所からお付きとして二百名の兵が派遣されることに決まつた。陳思揚はこの参詣を知つて、皇涼傘を見るために、一行が通るのを家の前の石段の上で待つていた。ちょうど皇涼傘が通りかかつたとき、陳思揚に恨みをもつ用人が

陳思揚の背中を押した。はずみで、陳思揚は皇涼傘に乗りかかり、巖奶奶のそばまで転がった。巖奶奶は怒り、陳思揚を蹴り、皇涼傘を裂いた。そこへ金華府の兵士たちが遅れて到着した。黄松山は、この遅刻が皇涼傘の事故を招いたのだと叱る一方、陳思揚が皇涼傘を壊したと証言すれば、遅刻は伏せておいてやろうと言った。

陳思揚はいったん捕えられたが、逃げようがないだろうと家に帰された。しかし、すぐ金華の役所に連行された。別れざわ、死を覚悟して、妻に自分の遺体を始末してほしいと依頼した。陳思揚は冤罪を叫んだがむだだった。

皇涼傘破壊の知らせは皇帝まで届き、黄松山は皇涼傘を剥奪されて、平民にもどることになった。陳思揚の裁きは金華府に委ねられ、結局、武挙人剥奪、無期の刑に処せられ、一生を獄中ですごした。

陳思揚の三人の息子は、父親のために一生割を食った。黄松山は平民になったが、有名は有名のままだった。天羅と金家は皇涼傘があってもなくても、田畑を耕しつづけ、何も変わることはなかった。

以上が『皇涼傘』の全部である。文字に起こされた『皇涼傘』は全一一一頁。一頁二十二行、行二十六字で

あるから、文字がすべて埋まっているという単純計算で、六万三千字あまりである。しかし、先に短篇で見た例から考えれば、じつさいの上演ではもっともっと膨らむことが推測される。

黄松山は、諱を学邃あるいは樸といい、清の嘉慶五（一八〇〇）年に生まれて同治六（一八六七）年に没した。黄松山の名が、幼少時に預けられた乳母の家に近い山の名に由来するのは、ほんとうにあったことであるようだ。多くの場所に広大な田畑をもち、金華一の大富豪であったこと、慈善に尽くし莫大な施しを行なったこと、太平天国を避けて金華を離れたこと、七人の妻をもったが男児がなかったこと、みな史実であるという。一方、皇涼傘を受けたことは伝記になく、じつさいには捐納<sup>26</sup>によって官位を得ていた。

こうした黄松山を、先に述べたように、この道情は、称えるでもなく、しかしこき下ろすでもない。そうした態度をはっきりさせることに、この道情は興味を示さない。もともと精彩がある人物は、破壊的な巖奶奶で、これもトリックスターと言えるだろう。興味深いのが、天羅という人物である。妻をふたりの男に寝とられ、面子が立たないはずだが、ばかのふりをして、飄々と生き抜

くさまが、好意的に描かれている。これは、道情をうたう人々の心情や価値観を反映しているものと考えられる。

むすびにかえて

以上、二〇一五年八月および十一月に行なった金華道情の実地調査について、報告を行なった。

一 朱順根さんについて では、傑出した、そして典型的なひとりの藝人者をとおして、金華道情を見た。報告者には、朱順根さんが、これまで中国に無数に生き、基層の部分で文学の創作に貢献してきた「負鼓盲翁」の代表として、自分の前でうたい語り、そして話しをされているように感じられる。道情にかかわりのないことも多く綴ったのは、そのためである。金華道情はもちろんとともに、朱順根さんへ大きな敬意をこめて、ここに情報提供した。

文学研究からいえば、朱順根さんの道情が押韻しないことがとくに注目される。

二 積道書場における道情の上演については、金華道情を含む非物質文化遺産の保護に中華人民共和国政府

が力を入れる中、その文化政策の現状を、末端の藝人の場から見た報告のようになつた。しかし、報告者の関心は、より広く、中国におけるうたと語りの藝人の場として、過去から現在まで、どのような環境があり得たのか、それを知ることにある。政治権力と藝人のかかわりなどは、中国文化史における重要な問題のひとつである。

三 金華道情の演目 では、調査で接し得た道情の演目について紹介し、若干の分析・考察を行つた。金華道情の文字テキストが少ない、報告者が金華方言を解さない、研究の計画に誤算があつたなど、多くの制限により、はなはだ不十分なものとなつたが、金華道情にかんする文献が少ない現状に鑑み、敢えて公表することにした。

前回報告の最後に、報告の本編にあたるこの「その二」で、金華道情についてまとめた考えを提出すると述べたが、報告者の誤算もあり、今回も見送らざるを得ない。ここでは、中国文化史において、文字の書き手たちのもつ価値観という覆いによって見えなくされたり、ゆがんで見えたりしているものが、金華道情の中で、自由の羽をのばし、生き生きとあるときには、わがもの

顔で躍動していることを確認しておくにとどめたい。たとえば、文中に述べた、民間のあつけらかんとしたエロティシズム、また、破壊的なトリックスターが、これにあたる。

覆いの下にあるもの、記録されないものは、注意しないと、なかったものにされたり、だからもあつたことにされなかつたりする。それはいかにも理不尽であるし、なによりも、真実を隠したり、見誤まることにつながるだろう。

朱順根さんは、遠い土地に生まれ育った朱順根さんとわたしが出会ったことを、「有縁份（縁があつたのだ）」としみじみ言われた。この文章が、金華道情と縁を結ぶ人を増やすことを願って、報告を終えたい。

注

- (1) 『追手門学院大学』アジア学科年報』第九号（通巻第三十号）、二〇一五年十二月所収、八十八—一〇一頁。
- (2) 金華道情の概要については、磯部祐子「金華道情の現状」五十一頁に簡にして要を得た説明がある。また、前回報告もあわせて見られたい。
- (3) 朱順根さんの藝名は「小白里」といい、これは金華方言で半盲の人を指すと、張根芳さんがご教示くださった。金

華道情の藝能者として生きていかざるを得なかったことから、残された片目の視覚も十分なものではなかったことが知られる。

- (4) 「包公と牛の舌盗人」「賢い嫁の話」は、文字に起こされたテキストがないため、内容にあわせて報告者がつけたタイトルである。

- (5) 「張百屁売小猪」は、『金華道情攤頭集』では「張百屁買小猪」と記されるが、内容からみて「売」に作るべきであるから、本報告では「売」と記す。

- (6) 張根芳主編『金華道情 皇涼傘 双玉球』と『金華道情攤頭集』である。

- (7) 『金華道情』伝承人物、貳 金華道情両伝承人 朱順根、八十二—八十五頁。

- (8) 夏雲燈は一八九六年生まれ。『金華道情』伝承人物（七十三—七十四頁）に略伝がある。この人は盲人ではない。

- (9) 道情はうたいまた語る藝能であるが、煩瑣を避けるため、以下「うたう」とのみ記すことがある。

- (10) 『金華道情』伝承人物、貳 金華道情両伝承人 朱順根、八十二—八十五頁。

- (11) 朱順根さんの道情については盛根旺「金華道情的説唱藝術」で、より具体的、専門的な分析がなされている。また、これを参照した分析が、磯部祐子「金華道情の現状」五十二頁および五十五—五十六頁にある。

- (12) 朱順根さんの道情に押韻しない部分があることについては、張根芳先生のご教示および盛根旺「金華道情的説唱藝術」一頁による。すでに出版されている朱順根さんの上演

にもとづくテキストを見ると、押韻している部分が多いが、これが朱順根さんのうたに基づくのか、テキストをはじめに整理した盛根旺さんによるのかは不明である。

(13) 金華道情が宗教性をもたないことについては、磯部祐子

「金華道情の一側面―呆女婿型と艶笑型―」一二二頁参照。

(14) 張根芳「關於金華道情」、凡弓「∞的博客(張根芳先生ブログ) 掲載、二〇一三年五月二十日アップロード。

(15) 「包公と牛の舌盗人」が上演された日は、遅れて到着して開始時間がわからないため、所要時間も不明である。

(16) 鶏の胃を指すことばは zongzi のように聴いたが、文字は不明である。『金華方言詞典』で「春」に類似の発音を調べてもわからなかった。「両頭春」については、『中国語大辞典』上、角川書店、二〇〇四年、一九一〇頁「両頭(兎)」の項に説明がある。また、娘が捧げた祈りを、一回めの説明では、朱順根さんは以下のように言われた。「謝天謝地 謝田公田婆 去年早一日 今年遅一天 明年両頭春」。

(17) のちに見る『皇涼傘』の天羅の人物形象に、このことがよく示されている。

(18) 前回報告で、盛根旺さんが朱順根さんの弟子であると記したのは、報告者の誤解であった。盛根旺さんは、「説書」すなわち「評書」と呼ばれる語りものの藝能者だということ、張根芳先生から改めてうかがった。盛根旺さんはみずから評書を創作もされるそうである。

(19) 磯部祐子「金華道情の現状」六十六―七十七頁。この報告中の翻訳については、報告者の「文学の論文・報告にお

いては、特別な理由がなければ、筆者自身が作成した翻訳を掲載すべきである」という方針にもとづき、報告者が作成した。しかし、作成にあたって、磯部先生の翻訳を参考にさせていたことは言うまでもない。

(20) 樓科進(当時金華市金東区政協文史資料編輯委員会主任)『金華道情攤頭集』序の最後の部分に次のように述べられている。「金華道情は一門民間藝術、不屬於高雅藝術、因此、可稱為一種俗文化。它來自民間、因而不時會透露出一些“俗”氣、講的是機智人物、愚蠢人物故事、還有一些“黃段子”、輩故事、有時讓人感到不可耐。然而、我們這箇集子不是一箇宣伝品、而是一箇非物質文化遺產項目的資料本、重在保存、便於後人用作研究資料、僅此而已。」

(21) 『金華道情攤頭集』「張百屁買小豬」六十三―六十七頁。インターネットサイト「逍客巴巴」において、『大元義俠図』(文字版)に付されていた解説による。

(23) 『天豹図』(作者不詳、嘉慶十九年序本、東洋文庫蔵)は『古本小説集成』中の二冊(上下)として、上海古籍出版社から一九九〇年に刊行されている。その解説および『中国通俗小説総目提要』中国文联出版公司、一九九〇年、六二〇頁に弾詞『天寶図』があることが述べられている。

(24) 陶君起編著『京劇劇目初探』中国戯劇出版社、一九八〇年、「天寶図」、三〇四―三〇五頁。

(25) 『金華道情』「故事發生在金華及周辺城郷の金華道情」一三六頁には、光緒三(一八七七)年、游宅街の事件と記されている。

(26) 黄松山の伝記については、後裔である黄曉剛さんがプロ

グ(新浪博客)に掲載されていた。張根芳先生のご助力によつて、黄曉剛さんと連絡が取れ、伝記は民国一二(一九二三)年刊『東池黄氏宗譜』のうち「敦三百七十三質夫公伝」にもとづいて書かれ、ブログに掲載されたものであるということがわかった。原本を見る便がないため、ブログの記載に拠った。微信(wechat)による突然の質問に回答をくださった黄曉剛さんに、この場をかりて感謝を申し上げます。

#### 参考文献

- 章曉華・吳瑯雲・章竹林『金華道情』浙江攝影出版社、浙江省非物質文化遺產代表作叢書、二〇一四年
- 磯部祐子『金華道情の現状』『中国江南唱導文藝研究—上演・テキスト・信仰—』平成二十三年度～二十五年年度科学研究費基盤研究(C) 研究報告書、二〇一四年三月所収、四十九—一〇二頁
- 磯部祐子『金華道情の側面—呆サ婿型と艶笑型—』『富山大学人文学部紀要』第六十五号、二〇一六年八月所収
- 張根芳主編『金華道情 双珠花』文化藝術出版社、二〇〇八年
- 張根芳主編『金華道情 皇涼傘 双玉球』文化藝術出版社、二〇〇八年
- 金華市金東区政協文史資料委員会編『金華道情攤頭集』(『金華市金東区政協文史資料』第十一輯)、二〇一二年
- 李榮主編、曹志耘編纂『金華方言詞典—江蘇教育出版社、一九九六年
- 『中国通俗小説総目提要』中国文聯出版公司、一九九〇年

陶君起編著『京劇劇目初探』中国戲劇出版社、一九八〇年、盛根旺「金華道情的説唱藝術」国遺「传承人朱順根的唱法技巧略談」『金東民間文化』二〇一二年第一期(創刊号)、五十三—五十六頁

張沢洪『道教唱道情与中国民間文化研究』人民出版社、二〇一一年

松家裕子『金華道情調査報告・その一—二〇一二年三月・二〇一三年三月—』(『追手門学院大学』アジア学科年報)第九号(通巻第三十号)、二〇一五年十二月所収、八十八—一〇一頁

#### 参考サイト

- 凡弓198 博客 張根芳〈關於金華道情〉  
[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_630d976b0101a4d6.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_630d976b0101a4d6.html)
- 「道客巴巴」『大元義侠図』(文字版) 解説  
<http://www.doc88.com/p-5965419212547.html>
- 「新浪博客」黄太子 金華名人 黄松山  
[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_7eece43e0102vz0f.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_7eece43e0102vz0f.html)

この報告は、「浙江金華口承文藝研究—語りもの藝能「金華道情」を中心に—」(平成二六～二八年度科学研究費基盤研究(C)、課題番号二六三三〇四一八、研究代表者…松家裕子)の成果の一部である。